



幼馴染みと

ドキドキ
初体験

ニート

試し読み版

桜空

表紙イラスト：明地隼

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『幼馴染みとニーソとドキドキ初体験』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



幼馴染みとニートと
ドキドキ初体験

桜空

表紙 / 明地雷

登場人物紹介

Characters

かわかみさつき

川上皐

モデルのように細身で長い美脚を誇る勝ち気な生徒会長。ただ、貧乳がちよっぴりコンプレックス。

うえすぎたかし

上杉貴司

皐の同級生。お調子ものの少年で、足フェチの巨乳好き。

「行つてらっしゃいませご主人さま」

よく晴れた秋の日曜日、園宮学園そのみやは学園祭を行つており非常に賑わつていた。ありとあらゆる教室で展示やショーが行われ、校庭や中庭にも屋台を出店。若き特有の元氣と活気に溢れていた。

ソースの焼ける香ばしい匂い、鉄板を叩く音に誘われて老若男女が並ぶ。

一般の客もかなり来場しており、特に人気なのが三年生のとある教室で開いている。

「お待たせいたしました、ご主人さま」

コスプレによるメイド喫茶だった。

「はい、やきそばできましたよ」

「これ七番にお願いっ」

「大変混雑しております、長時間のご利用はどうかご容赦下さい」

明るく朗らかな女性店員は皆、黒を基調としたメイド服に白エプロンを着用、スカートの丈は短く太腿が大胆に覗く。

その中でも特に輝いていたのが、

「お帰りなさいませご主人さま」

大きな瞳と黒髪のショートカットがよく似合うスレンダーな美少女、川上皐かわかみつきその人だ。

モデルのように細身で長い美脚、脂肪のない上半身。小顔でシャープな顎のラインとい

い、紛れもない美少女だが、明るい雰囲気^{ウツクシキ}が親しみを持たせていた。

「ご注文はいかがいましてしょう」

笑顔のステキな彼女に問われ視線をメニューに落とす客。確認してからすすつと視線を外す。

注文を取りに行く際やテーブルに案内する時など、何度も何かを探すように目で追う。

（後夜祭のフォークダンス、誘ってくれないのかな）

同じ接客係である幼馴染みの上杉貴司^{ウエノキタカシ}をついつい眺めてしまう。

後夜祭でキャンプファイアを囲み、フォークダンスを踊る。それはもう告白と同義。いつもは強気でリードするスレンダー美少女もさすがに誘えなかった。

幼馴染のままでここまでできたけど、ずっと特別な関係になりたいと思っていた。このまま卒業なんて絶対に嫌だ。

（でも誘ってくれないなら脈、ないのかな）

思い悩む臯のお尻を軽薄そうな客が触る。

「きゃっ」と悲鳴が出る前に、反射的に振り向きざまの右ストレートで吹っ飛ばす。

「ぐげ」

醜い声を漏らす男の腹を、すらりと長くむしゃぶりつきたくなるような美脚で踏みつけた。黒のニーソックスとフリル状のスカートの間に、白く眩い絶対領域が存在する。

「あんた如き低俗なゴミが、私に触れていいと思ってるの？ 地獄に墮とすわよ！」
冷たく見下した視線で睨まれ、男が逆上した。

「何しやがる！」

足をどけて立ち上がり、今にも殴りかかりそうな険悪な雰囲気。

「やめろっ」

貴司が幼馴染みを守るように立ちはだかる。

「貴司」

頼もしい背中にきゅんと胸が締めつけられる。

(いざって時に頼りになるんだから)

「何だデメエ、すっこんでろ」

真剣に対峙する二人。そして彼はおもむろに臯の方を振り向いて、自らの手をべたりとスレンダーな胸に押し当ててる。

「へ？」

「見ろこの絶壁を、崖とかまな板とか、男？ みたいな胸を」

揉もうとするがすすかすすかで揉めない。

「揉めないんだぞ！ これ以上彼女を辱め、貶めるつもりか!? 揉むなら藤森ふじもりさんの九二センチFカップを揉むべきだ」

襲いかかってくるのかと思いきや、チャックを下ろして肉棒は取り出したものの、それ以外はそのまま。

「きゃっ。ば、ばか急に見せるなそんなもの」

（これが、本物のおちんちん。血管が浮き出てて色とか形も卑猥で、思ってたよりグロい。ニーソ穿いてるからまだマシだけど）

「うー、しし、仕方ないな。今回だけだぞ」

つん、つんと爪先でつついて様子を窺い、ぴくんと跳ねる肉棒に驚愕する。

「うご、動いたぞっ」

「当たり前だ、胸だつてジャンプしたら動いて揺れるんだ——ごめん」

「謝るな！ 惨めだから」

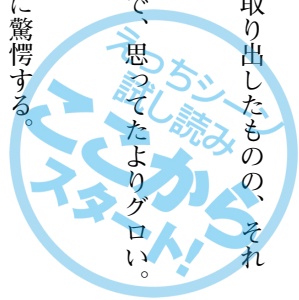
（うう、でもそっか、動くんだ）

ニーソックスがなめらかに肉棒を滑り、薄布一枚隔てた足の感触に元気に反応する。

「あんまり勃たせると、折るぞ!?!」

上に立つ肉棒を前に押し倒し、こんなに乱暴にしているのか不安になる。

一方で貴司は見えそうで見えない、絶対領域のその上を必死に見ようと躍起になっていた。急所を押さえられた状態で身を振り、目を細め、上半身を揺らして少しでも見たいと足掻いている。



けれど見えない、が細く長い脚線美と魅惑の太腿、下からのアングルだけでも興奮するのか勃起は遅しく成長していく。

絶対領域と黒のニーソックスを穢したいと願ひ、夢想しているのだろう、視線に異常な執念を感じる。

(うう、何かびくびくしてる。生きてるみたいで気持ち悪い)

生温かい体温を靴下越しに感じ、流れる血液や静脈さえも微かな刺激となつてつい足を上げてしまふ。するとフリル状のスカートと白エプロンが揺れる。

「んん、あつ。くう、皐の足気持ちいい」

「そ、そうか？」

「するする滑つて、強過ぎず弱すぎずしゆりしゆり布の感触が優しくチンポ摩擦して、でも薄いから足の指の感触もあつて、あああ」

胴部を上下に擦るだけでなくカリ首、そして亀頭を優しくさする。足の指を器用に動かし撫でていると先走り液が滲む。

(何か出た！これが精子？うわ気持ち悪い、私のニーソが……)

本来潤滑油として活躍する先走り液も、黒靴下に吸収されて役目を果たせないでいた。

鈴口を親指で弄くり足の裏で強めに撫でる。踵で根元を踏み押さえて、指先で繊細に擦るようにして少しずつ先端へ移動していく。裏筋を優しく責められて彼は煩悶、苦しそう

「俺の息子が勃たないんだ、責任取ってくれ」

「い、嫌にきまつてるだろ」

「でもこのまま一生、一生勃たなかったら……」

さすがにそれはないと思うが、罪悪感がチクリと胸を刺す。

「うっ。……わ、かった。でもどうしたら——」

「足開いたままじつとしてて」

肩幅よりも少し広く開いた内腿を、指先で撫で擦り手でさすられむずむずする。

「ふ、ひゃん」

スタイル抜群の臍がフェンスに背を預け、立ったまま身じろぎする。

フェンスを握る手に力が入り鉄の音が鳴る。

「ほら、じつとしてってば」

ふくらはぎ 脹脛に抱きつき、絶対領域に頬擦りをして恍惚の表情になる。

「はあ。幸せだ」

吐息が足の付け根にかかり眉を顰める。

「ひう」

瑞々しくおいしそうな太腿を舌で舐められて思わず声が漏れた。

「可愛い声。初めて聞いた」



からかわれたみたいで恥ずかしく顔を両手で隠した。

「メイド服可愛いな」

「ふん。どうせ服が、だろ」

悪態をつく。

「似合ってるよ。臯が着てるから可愛いんだ」

反論しようと口を開きかけ、結局何も言えなかつた。

興奮による昂りが彼の口から漏れて、熱が足の際どい付け根にかかる。僅かに冷えた空気が熱い吐息とで女体がぶるると震える。

神々しい、触れてはならない神の領域、その内腿にキスした。一ヶ所ではなく何ヶ所にもキスしてむしゃぶりつく。最後に領域の上、スカートの内側を強く吸うとキスマークが浮かび上がる。

「ん、んうう。そ……なに、あ」

擦ったいのを必死に耐えるが、唇を引き結んでいてもゆるんでしまう。

シヨートヘアが揺れて弾む。

「……っ——あ、ん」

囁くような艶かしい声が漏れ、シヨーツが湿り気を帯びる。口をばくばく開閉させて上向き、喉元を晒した。

ニーソックスの中に舌を差し入れて舐め、次に薄布の上から太腿や膝の裏をねぶる。脛に下りていき、衣装に合わせた可愛らしい靴を脱がされ踵を口に含まれる。

(踵まで。もしかして貴司って変態なのか?)

上げさせた足の裏の匂いを存分に嗅いで、親指をしゃぶり口に含んで吸う。ちゅぱちゅぱ鳴り、濡れていく靴下に嫌悪を抱きながらも、貴司の為と健気に文句の一つも言わず耐える。

上へ戻っていき、スカートに隠れて普段は見えないだろうキスマークをねっとりねぶられる。

乙女の香りをぎゅっと濃縮した、芳しい匂いを嗅ぐと脳が、その濃さ濃密さにぐらりと揺れ泥酔する。愛おしく舐めて女神の戯れる樂園に再びキスの雨を降らされ、甘い疼きが生じる。

「そんなに嗅ぐな。は、恥ずか、しい」

カアツと頬を紅潮させた。

「だめだ」

いじわる、と思ったがそうではなかった。

「やつぱり勃たない。フェラしてくれ、そうしたら勃つかも」

「ふえ、口で!!」

そんな風にする時もあるとみっちゃんが言っていたが、まさか自分が言われるなんて。未知ゆえに恐怖もあったが不安はそれだけではない。

(今の時間、屋上は立ち入り禁止だから誰も来ないとは思うけど)
誰かに見られたら終わりだ。

唾液にまみれた足が不快だが、貴司のだと思おうと不思議と嫌でなくなった。

「いや！」

朝にも見た陰茎を取り出されて声を上げ、差し出されて顔を近付けるとむわつと腐臭が漂い顔を顰める。

(うっ臭い。朝は離れてたから気にならなかつたけど、近いとこんなに臭いのか。それに生々しくて見てられない)

直視するのは恥ずかしく顔を背けてしまうが、それではだめだとかぶりを振って陰茎を見やる。

膝立ちとなつて、何度か舐めようと試みてはやめてを繰り返した。

ようやく、おずおずと舌先で亀頭に触れるとしよっぱかった。こんな味なのかなと幼馴染みを見やる。すると寸分違わず疑問を理解した彼はあっさりと云つてのけた。

「ああ、さっきトイレ行ったからかな。男は拭かないし」

「バカかお前！」

思わず怒鳴っていた。同時に思い出す。

（そういえば私、昼に行つたきり忙しくて行つてない。思い出したら急に行きたくなってきた）

股をもじもじさせて話しかける。

「な、なあ」

「だゝめ」

「う、まだ何も言つてないだろ」

「それでもだめ」

諦めて恐る恐る亀頭に舌で触れた。

そーっと舐め、根元から先端までなぞり上げていく。何往復もして舌尖で擦る。

「啞えてくれ。あと少しなんだ」

反応し始めた陰茎を勃起させる為、口に含み顔を前後に振るがぎこちない。

「そうじゃなくて、吸いながら唇締めて扱いて。ペロも、んっそう」

陰茎が口の中で少しずつ回復してゆく。

「お、大きふなつれきふあぞ」

「ああ。でもどうせだから最後までしてくれ」

（くっ調子に乗つて。しかしここでやめるのも、確かに酷か。そ、それに私……貴司のを

くわ、唾えてる。うんやめられないよな)

手で支え、丁寧に舐める。痛い痛い飛んでいけ、そんな気持ちで舌を這わす。慈愛に満ちた奉仕に陰茎は大きさと、硬度を取り戻していく。

「お、おおっ」

「完全復活、だな」

いきり勃つ陰茎をはむつと唾えて舌を絡める。亀頭を舌の先で腹で撫で回し、ざらつく舌の味を教え込む。同時に彼の味も舌に記憶する。

(うつまたあの液体が出てきた。こんなにもぬるぬるしてたのか)

「臍、ガマン汁飲んで、啜ってくれ」

「らまんひる？ んおあ、ちゆるちゆる」

鈴口をつつき穿くり溢れてきた汁を舌で拭い、どううと啜り喉奥へ落としていく。

(しょっぱ、い？ 薄くてあんまり味はしないけど……何かヘン)

奥まで陰茎を飲み込み頬張る。喉を締めて亀頭を刺激、唇を閉じて真空状態を作り出す。頬を窄めて勃起陰茎に吸いつきながら小顔を前後動させる。

「うをおお、臍がそんなエロい顔するなんて！」

硬く太い勃起に吸いつくとじゅぶ、じゅぽつと激しく淫らな音が飛び交った。

(エロい顔なんてしてないっ。変な音だって貴司が啜れって言うから、飲んだら鳴っただ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>